
石田 裕之 (いしだ ひろゆき)



【書名】 兔の眼
【著者】 灰谷健次郎
【発行】 角川書店

小学校の頃に出会い、その後の私の人生に大きく影響を与えてくれたと言っても過言ではない1冊。灰谷健次郎さんの作品はすべてオススメしたいくらいですが、この本はその中でも是非とも読んでいただきたい1冊です。1974年に刊行された本なので、時代考証が少々古臭く感じるかもしれませんが、高度経済成長期と呼ばれていた時代の日本で、小学校の新米先生が、多種多様な生徒とのつながりを通して、関わり合いを必死に悩み前に進んでいく姿に多くを学ぶことができます。大学の生活は、これまでの人生とは様変わりした人間関係となっているかと思えます。そうした人間関係をどのように構築していくか、という課題に大きなヒントを与えてくれると思います。

【書名】 科学の発見
【著者】 スティーブン・ワインバーグ (赤根洋子 訳)
【発行】 文藝春秋

ノーベル物理学賞受賞者である著者が、テキサス大学の教養課程の学部生に向けて行っていた講義のノートをもとに作成された本です。『本書は不遜な歴史書だ』とはじめに書かれるくらい、これまでにない視点で科学の歴史をぶった切る痛快な1冊です。これまでに艱難辛苦あった先人たちの努力のおかげで便利に生きられている現代人であり、さらに最先端科学における大家である著者が、現代の科学者の基準で過去の科学者を記し・評しています。時には、誰もが知っている有名科学者であっても過大評価されていると一刀両断します。しかしながら、ただ単純に未発達な科学を批判・非難しているわけではもちろんなく、科学というものを進展させるためにはどういった思考でなければいけなかったか、ということを示唆してくれています。温故知新という言葉があるように、過去の失敗や成功をしっかりとした価値基準で見つめ評された本書を読むことで、これからの未来を切り拓いていくみなさんの今後の確かな眼を養うことに一役買ってくれることでしょう。

【書名】おいしいコーヒーのいれ方シリーズ

【著者】村山由佳

【発行】集英社

First season全10巻Second season全9巻の総勢19巻という長丁場です。お互いの家族の都合でしばらく会っていなかった親戚と一緒に住むこととなった主人公が、久しぶりにあった血の繋がりのない（と後にわかった）5歳年上のお姉さんに恋をし、紆余曲折あって付き合うこととなったfirst season。その主人公に訪れる幾多の困難を乗り越えながら、男として、人として大きく成長を遂げていくsecond season。共におすすめです。特に、ストーリーの大部分が、主人公の大学生時代で巻き起こる話なので、みなさんの心情にリンクするものも多いのではないかと思います。

【書名】円紫さんと《私》シリーズ

【著者】北村薫

【発行】東京創元社

「空飛ぶ馬」「夜の蟬」「秋の花」「六の宮の姫君」「朝霧」「太宰治の辞書」が刊行中の6冊で、これらの作品をまとめて『円紫さんと《私》シリーズ』と呼びます。本書の主人公《私》が、春桜亭円紫という落語家の多大な助力により、何気ない日常の中にある非現実のような謎を解いていく日常系ミステリと呼ばれるジャンルのシリーズです。《私》の身の回りに起こる事件の謎を、円紫さんは概要を聞くだけで解いてしまいます。物事を見る角度を少し変えるだけで、なんてことない日常にありふれたことが謎になったり、その逆で、難解な謎だと思っていたものが単なる偶然の重なりだったりということもあります。各々大きなストーリーとしてはつながっていますが、どれから手を付けても楽しめる本だと思います。あなたの身の回りに起こった不思議なことも円紫さんが解決してくれるかも！？

【書名】コンビニ人間

【著者】村田沙耶香

【発行】文藝春秋

第155回芥川賞を受賞した本書は、18年ずっとコンビニでバイトを続けている女性が主人公です。周囲の友人の生活とは違っていても、生活に必要な最低限以外のものはそぎ落とし、コンビニでバイトをしてコンビニのものを食べてというルーティーンに大いに満足しきっている主人公は、自分は何の変哲

もなく普通に生きていると思い生活を続けていました。ある日、身内からも病的だと思われていたその生活を、なんとか『普通の人間』として生きていると思わせようと一計を案じます。普段何も意識をせずに生活をしている『普通』とは何か？を深く考える1冊です。

【書名】 物理法則はいかにして発見されたか

【著者】 R. P. ファインマン (江沢洋 訳)

【発行】 岩波書店

1965年にノーベル物理学賞を受賞した著者が、コーネル大学で行った講演と、ノーベル賞受賞講演とをまとめた1冊。数学と物理学の基本的なつながりや、物理学の基本法則をいかに平易な言葉で説明するか、ということが書かれています。ノーベル賞をも受賞し、現代物理学へ多大な貢献をしたほどの稀代の科学者であるにもかかわらず、非常に人間的に興味深い人物であったことが文章からも伺えます。科学的思考が少し苦手だなと思っている人ほど読んでほしいです。

【書名】 重力波は歌う アインシュタイン最後の宿題に挑んだ科学者たち

【著者】 ジャンナ・レヴィン (田沢恭子 訳)

【発行】 早川書房

アインシュタインがその存在を予言してから約100年経ってようやく検出に成功した重力波。その重力波には音階があるといます。何も伝えるものがなくても時空が歪むことによって生じるその音を、人類は如何にして発見することができたか？その発見までの壮大なストーリーが、裏話も含めて具に書かれています。功績がたたえられて2017年にノーベル物理学賞が授与された世紀の大実験の歴史を紐解いてみませんか？

【書名】 つめたいよるに

【著者】 江國香織

【発行】 新潮社

2004年に受賞した直木賞だけではなく、数多の文学賞を受賞している非常に著名な著者の短編集です。短編集ということもあり、1つ1つの文量はそれほど多くなく、読みやすいと思います。私は中でも、『デューク』という作品がおすすめです。長く飼った愛犬デュークを亡くした悲しみを抱えつつ生

VIRGINIBUS PUERISQUE

きていた主人公は、ある日そのデュークにどことなく似た男の子と出会います。その男の子と過ごした1日を描いた奇跡のようなお話。涙なくしては読めません。